

社会、教育、家族のあり方と課題。
ジェンダーの視点で問い直す、

第1回

ジェンダー平等の教育を考える総合研究会 総合研究会

「とらわれ」から自由になること。
多様性と人権、民主主義をより深く考え、学び、



大阪大学教授
講演 牟田和恵 (むた かずえ) さん
「学問・教育の危機とジェンダー
～家族社会学者／杉田水脈裁判の原告として～」

2020年4月18日(土) 13時～

会場: 松本市勤労者福祉センター

どなたでも参加できます。参加費は無料。お申込はHPから。

教文
会議

長野県教育文化会議

長野市県町593

<http://kyobun-kaigi.org> TEL 026-234-2216 FAX 026-234-2219

E-mail kyobun.nagano-h@educas.jp



教文会議のHPをご覧ください。会議や研究会の詳細、申込、申請各種こちらから。
左のQRコードで、または、「長野県教文会議」で検索してください。

教文通信

発行所 長野県教育文化会議
発行人 寺尾 真純

●おまな内容●

02
教文会議 50周年
03-04
外国語研究会より

教文通信 Lite
01-10
えでゆきゆる

教文会議50年

参加と共同 自由闊達、自主的な研究活動へ
共に広め 深めよう

議長 寺尾 真純

新年度を迎え一人ひとりが新たな思いを抱かれていますかと思えます。新型コロナウイルスの影響で落ち着かない日々の連続ともなっているかと思えます。皆さまの心中を察します。四月、年度始まり、新たな活動、新たな仲間、新たな出会いの時を迎えています。

本年度は教文会議にとっても特別な年となります。幾多の困難の中、民主教育実現への熱い願いを込め、県下各地支部から全県統一、発足50年を迎えます。その活動は教師としての自覚を高め、自由闊達、自主的な研鑽の場であり、日々、生徒・保護者・地域・社会との関わりの中で実践と検証を通し、教育研究を深め、広げてきた歴史でもあります。

教育は1947年



の教基法制定にもあるように、戦争の深い反省にたち、憲法の精神に則り、平和を希求し民主的、文化的社会の創造の役割を求められてきました。私たちの研修（研究・修養）に関しては「研修は教職員の欲求に近い」との指摘もあります。学校教育は、多様な活動が組織的に行われることが特徴です。教育活動の発展にとって、一人ひとりの教師及び教職員集団が、官製研修のみならず自主研修など多様な機会を持ちうるものが極めて重要となります。教育公務員特例法では21条、22条において私たちの研修について義務と権利が記されています。教師に権利として自主的な研修を、法の根拠のもとに保障し、教育行政はそのための条件整備の役割を果たすという趣旨といえます。健康のもと、共に、大いに学びたいと思えます。

指す自主的な取り組みに抗する動きが続けられてきた歴史もあります。一連の教育「改革」は、グローバル化への対応の政府財界のための政策となっています。Society5.0には全く持つて幸せを感じません。様々な施策は格差を拡大固定化し、生きづらさを増すものとなっています。本来、教育や人間の生はもつと奥行きのあるもので、現局面は憲法の希求する社会の創造、権利の主体（主権者）として市民が社会に参加することがこれまで以上に求められていると言えます。これは教文会議の提唱する「共通教養論」一現在未来を切り拓くにあたり、高校生の共通教養を、具体的に生徒と教師の要求、保護者・地域の願いを、当事者間で語りあい、実践の中で検証しながら発展させていくことにつながります。

今年度の教文活動が始まります。学び続ける教師として、教文会議ならではの、しなやかで、幅広く、奥深く、活動を通す中、同僚や大学等研究者、市民と刺激しあってきたユニークな歴史。長きにわたり、教育の専門家として、集団的に教育のあり方を探求し、子どもたちの発達にとって最も適切な教育内容と方法について旺盛な研究会活動を行ってきた半世紀。次世代にも平和で民主的な、今以上に素敵な社会の創造に繋がる教文活動を充実させていきたいと思えます。

仲間を広げ、充実した活動に繋がしましょう。

報告

外国語教育全県研究会

松本道弘さん講演会 2020. 1. 11

「動脈英語と静脈英語」

松本県ヶ丘高校 吉越慎一

松本道弘先生と云えば「斬れる英語」の提唱者として名高い。日米口語英語辞典（絶版）において、いわゆる「大和言葉」をどう英語に置き換えるかを豊富な実例を以て示し、当時の好事家の間で反響を呼んだことは記憶に新しい。「固定は死」をモットーとし、一つの見解に執着することなく、常に新たな可能性を求め続けて現在もお模索探求を続けている。今回のメインテーマである「動脈英語」を一言で言えば、呼吸器系から新鮮な酸素を受け取り、鮮やかな赤を湛えながら、身体の隅々を巡り、生命の営みを活性化させる動脈血の様に、学習者の心を自在に巡り、知性・感性に止まらず、人間性そのものを刷新する英語のことである。それは流れ動く活力を失い、一つ所に滞留し、青みを帯びて固定する静脈血の様に、一つ見解を絶対とし変容を拒む英語の対局にある。銀鱗を輝かせて清流に踊り、掴み捕ったと思う端から、指の間をすり抜けて行く英語である。

私たちの身体を巡る血液は、心臓で呼吸器から酸素を受け取り、身体に生命を送り届ける動脈血

にも、酸素を失って深い青にしむ動脈血にもなる。松本先生は、知識として沈殿し、存在の一隅に滞留する英語―受験英語もその一種であろうか―に生命を吹き込み、自在に存在の内部を巡り、私達を活性化させる英語のあり方を提唱し、同様の志を共有する者―松本先生の言う「道友」―を求めている。松本先生の哲学は深淵で難解であると同時に、闊達で平易でもある。知性で捉えず、感性で捉えることで、松本先生ほどの高みには近づけないにせよ、その精神の纖毛のそよぎを感じることが出来るのではないだろうか……。と感じている。



松本県ヶ丘高校 郷原俊一

講演会前夜の懇親会は高校より3名の教員と松本大学から2名の教員とで松本先生を囲んでの懇親会となりました。また、講演会当日の午前中は松本城散策と市内蕎麦屋での昼食会も実施されました。

松本先生と語り合っていると同時通訳者は好奇心の塊でなくては勤まらないということを感じます。あらゆる事に興味関心をお持ちで、しかもかなりの博学です。

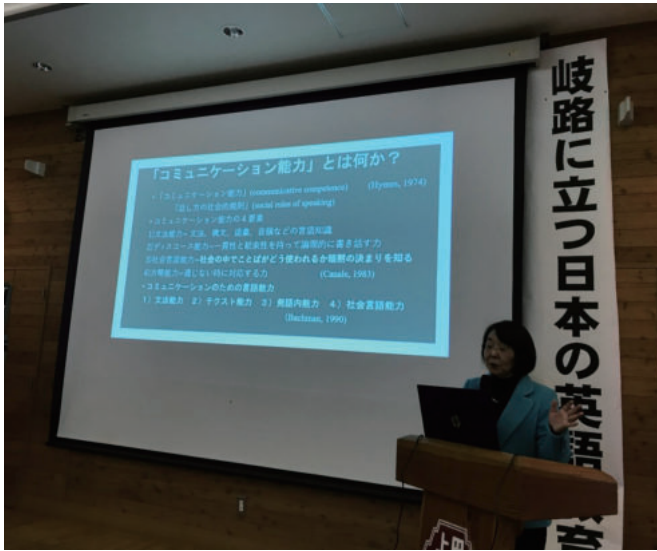
松本先生は今回の講演会が1回のみで終わりではなくこれから、長野県での学習活動へとつながっていくことを考えておいでになります。今後、何らかの形で自主的な研修の機会を設けていきますので、今回の講演会に参加されなかつた先生方もご参加いただければ有り難いです。松本先生はこの3月に80歳、傘寿を迎えられました。未だ未だ勢いを持って活躍されていらっしゃいます。我々も攻めの姿勢で臨むべきだと今回の講演会を通じて感じさせられました。

報告

鳥飼玖美子さん講演会

「岐路に立つ日本の英語教育」

2020年2月16日(日)、上田染谷丘高校にて標記講演会が開催されました。長野県高等学校英語教育研究会(ENEC)と教文の共催で、英語教育界では知らない人はいない鳥飼玖美子さん(立教大学名誉教授)が上田に来るといっことで、会場はおよそ200人を超える参加者で熱気に包まれました。



講演の冒頭、鳥飼さんは「ペリー来航以来、『英語を話したい』日本人は、慢性的に英語教育の改革を求めてきた」と語り、現在のような英会話偏重とも言える英語教育への期待は戦後にもすでに表れていたことを示しました。またそういった流れの中から経済界が「英語が使える」人材に乗り出してきた、それが現在の「英語教育ビジネス」の源流になっているということも語りました。

特に2019年11月1日に導入の「延期」が発表された「英語民間試験」については、学習指導要領に準拠していないこと、受験料の負担が増えること、試験の自身がバラバラで公平・公正さが担保されないこと、CEFR対照表へのスコアの換算が各業者任せられていること、出題・採点およびそれらのミスへの対応が不透明であること、また、試験業者が対策本などを販売する「利益相反」の疑いがあることなど数々の問題を指摘しました。

これからの英語教育については、文化的素養を身につけながら、読むことを軸に総合的に学ぶことが効果的であると指針を示し、「外国語は『異文化への窓』であり、言語への気づきを大切に、生涯を通じて学ぶことのできる『自立した学習者』を育てたい」と呼びかけました。

鳥飼さんが『英語教育、迫り来る破綻』（ひつじ書房）を共著されたのが2013年、そして



2020年のこの時点でまだ我々は「岐路」に立っています。これを踏みとどまらせているのは、鳥飼さんたち誠実な研究者であり、何より現場の教員たちです。日曜日に全県から講演会に結集するようなこの熱意を失わず、もう一度英語教育を学校現場に取り戻そう、改めてそう決意した講演会となりました。

外国語研究会 丸山大樹(飯山高校)